

大正末期から昭和初期における探偵小説と演劇の交差

——江戸川乱歩宛長谷川伸書簡群を視座として

後 藤 隆 基

一 江戸川乱歩・長谷川伸・二十一日会

一九二三年（大正十二）四月、雑誌『新青年』に「二銭銅貨」が掲載され、江戸川乱歩は作家デビューを果たした。一九二五年（大正十四）に明智小五郎初登場の「D坂の殺人事件」（『新青年』一月増刊）を発表し、同年秋、白井喬二が主唱者となって設立された大衆文芸作家の親睦団体〈二十一日会〉に参加している。会員は白井、本山荻舟、長谷川伸、国枝史郎、平山蘆江、矢田挿雲、土師清二、直木三十三（のち三十五）ら時代小説の書き手が名を連ね、小酒井不木、正木不如丘、乱歩ら探偵小説作家は少数派だった。報知新聞出版部の後援で機関誌『大衆文芸』（編集部は

池内祥三が担当。一九二六年一月～一九二七年七月）を發行し、大衆文芸運動の興隆を目的としていた。

小酒井不木から二十一日会への加入を勧められた乱歩は「本当の探偵小説は、大衆文学ではない、純文学よりもっとむずかしい（つまり読者の少ない）特殊の文学だと考えていた」（『探偵小説四十年』桃源社、一九六一年。以下同書の引用は光文社文庫版『探偵小説四十年（上）』による。六一頁）ため躊躇したが、自分を見いだしてくれた不木に逆らうわけにもいかず、渋々ながら、同人に加わった！。

長谷川伸は、都新聞に記者として勤務する傍ら小説や戯曲を発表していたが、一九二五年六月に退社して作家専業の生活に入った。長谷川伸と乱歩の初対面がいつかは詳

らかでないが、二十一日会参加の頃に知遇を得たものと思しい。また乱歩らが一九二五年四月に結成した〈探偵趣味の会〉の機関誌『探偵趣味』の第四号（一九二六年一月）に長谷川伸は初めて寄稿し、同人に加わるなど、二人は交流を深めていった。

二十一日会は毎月二十一日に数寄屋橋脇の料亭花の茶屋で例会を開き、機関誌の編集や経営に関する意見交換を行っていた。一九二六年（大正十五）一月に乱歩は大阪から東京へ転居するのだが、その噂を耳にした長谷川伸は、例会ごとに乱歩と会えることを心待ちにしていた「書簡①」。本文は第五節。以下同。ただ、上京したばかりの乱歩は神経衰弱に悩まされて小説の執筆もままならず、二十一日会の例会も欠席しがちだったというから（池内生「編集後記」『大衆文芸』一九二六年八月）、二人がどれだけ例会で顔を合わせていたかは定かでない。それでも、その年の九月十七日に長谷川伸の妻が病没した際、乱歩は悔やみ状を出しており、長谷川伸はそれに対する礼状のなかで、同人であるにもかかわらず『探偵趣味』に助力できないことを詫び、「心がけてゐるもの」⁴を一篇寄稿すると認めている「書簡②」。

探偵趣味の会といえ、乱歩はその「一番大きな催し」

（『探偵小説四十年（上）』一四二頁）として、一九二五年十月二十五日に大阪の六甲苦楽園で渡瀬淳子一座が上演した探偵ページェント「幽霊探偵（春日野緑脚色）」を挙げている。翌年九月二十四日には〈講演と映画と探偵寸劇の会〉（読売新聞社講堂）で探偵小説作家出演の「ユリエ殺し」（本位田準一作・演出）を上演。劇中で発射された銃弾が客席前列の観客（実は横溝正史）に当たった（と見せかけた）ため警官席で本物の制服巡査に扮した乱歩が駆けつけ、客席が騒然としたところで種明かしをするという「ピランデルロ風の見物をアツと言わせる趣向の寸劇」（江戸川乱歩「私の初役」『日本経済新聞』一九五四年八月二十三日）で、当初乱歩は明智小五郎役を振られていたらしい（横溝正史「ユリエ殺し」の記）『新青年』一九二六年十二月）。後年乱歩らは好んで文士劇を上演するが、そうした試みの一つでもあろう。

注意したいのは、この時期、探偵小説と演劇や映画の接続が模索されはじめていた、ということである。なかでも小酒井不木は、乱歩に「探偵小説が追々劇化され、映画化されて行くことは御互に愉快なことで、何とかして、その方でも物にしたいと思ひます」（一九二七年二月十八日付書簡）⁵と抱負を送り、意欲的な姿勢をみせていた。実際、

一九二七年（昭和二）には「紅蜘蛛奇譚」⁶や「龍門党異聞」⁷（『大衆文芸』八月）を執筆し、河合武雄、喜多村緑郎、伊井蓉峰ら新派俳優が上演するなど先駆的文業をのこした不木の存在が探偵小説と演劇の結節点となり、同時代の動向を牽引していくのである。

二 喜多村緑郎と小酒井不木

一九二七年三月、乱歩は休筆を宣言し、戸塚（東京市外）に居を移す。妻に下宿屋を営ませ、知友に転居届のはがきを出して独り東京を離れた。信州や新潟、京阪等を放浪した一年余については『探偵小説四十年』に詳しいが、桂春団治の落語を聴きに行つた先の京都で、乱歩はひと月ほど長逗留することとなる。

山下利三郎君の案内で、一夜を京に過してから、急に京都に住んでみたくなって、鴨川べりの宿屋に腰を据えてしまったのであるが、それが妙なきっかけになつて、書く方の仲間の人達にも会うような旅になつてしまったのである。そこで私は一カ月、其の半ばは病氣をして寝ていたのだけれど、鴨川を眺め暮らしたのであつたが、今いった山下利三郎君をはじめ〔略〕京都

に別邸を持つ長谷川伸氏や、志波西果氏その他映画関係の人々にも会うことになつてしまった。

（『探偵小説四十年（上）』二八六～二八七頁）

同時期にデビューした作家仲間の山下利三郎に宿を斡旋してもらつた乱歩だが、扁桃腺炎を患つて寝込んでしまふ。この年の六月頃、京都に別邸を借りた（翌年に引き払う）長谷川伸は⁸、山下が傍にいれば安心といひながらも旅先で病を得た乱歩を氣遣つており、その書簡からは、十歳年少の乱歩に対する深い敬慕の念が看取できる「書簡③」。

そんな病臥中の乱歩のもとに、不木から一通の手紙が届く。曰く「昔の浄瑠璃作者のやうに」合作によつて「探偵小説と鬻物及び大衆劇といったものを製産したい」（一九二七年十一月二日付小酒井不木書簡）⁹と。そして不木を中心に、乱歩、国枝史郎、長谷川伸、土師清二が〈耽綺社〉を結成し、翌年、長谷川伸の紹介で平山蘆江が加わつた（『探偵小説四十年（上）』三二九～三三〇頁）。会の名称は不木の発案で、曲亭馬琴ら文政期の好事家が集つた〈奇奇会〉に由来しており、長谷川伸によれば、探偵小説の愛好家である喜多村緑郎から、不木が探偵劇執筆の依頼を受け

たことがきっかけであったという（「耽綺社座談会」『サンデー毎日』一九二九年二月三日）¹⁰。

耽綺社が生まれた背景には、喜多村と不木の邂逅、そして両者が共有する探偵劇（大衆劇）の創造という欲求があった。そこで本節では、喜多村九寿子編『喜多村緑郎日記』（演劇出版社、一九六二年。以下『日記』と略記）と従来未紹介の同時代紙記事をもとに喜多村と不木の関係をたどってみたい。なお、浜田雄介編『子不語の夢——江戸川乱歩小酒井不木往復書簡集』（乱歩蔵びらき委員会、二〇〇四年）の脚注でも『日記』が参照されており、引用箇所に重複があることをあらかじめ断わっておく。

一九二五年の『日記』をみると、喜多村は興行や稽古等の合間の気分転換に探偵小説を乱読し、殊に夏の暑さに耐えかねて連日読書に没頭している¹¹。専門誌にも目を通し、己が批評眼に少なからぬ自負をもっていたようだ¹²。なかでも注目していた作家が、医学博士として科学的知識を有し、海外探偵小説の翻訳・紹介や評論等を『新青年』に発表していた、小酒井不木である。

小酒井博士の訳したのものには同じ博文館のものでも、流石にいゝところがある。「真夏の惨劇」は、ある文章

に力をもつてゐる。予想もしない事が再三出てくる。然しもの事は、さうした方が却つて興味がある。

（『日記』一九二五年十月二十一日条）

「真夏の惨劇」（ウィリアムズ原作）は『新青年』（一九二四年九月～一九二五年四月）に連載された翻訳作品である。一読者の新派俳優と作家が出会ったのは、一九二六年夏のことであった。

関東大震災後、大阪の萩之茶屋に移り住んでいた喜多村は、しばしば名古屋の新守座や末広座などで興行を打っていたが、あるとき名古屋弁護士会の三派（烏合会、茶話会、維新会）による裁判劇の舞台監督（演出）を依頼された。一九二三年（大正十二）に公布された陪審法（一九二八年施行）の宣伝企画で、脚本を名古屋在住の小酒井不木が書くという（『日記』一九二六年八月十五日条）¹³。まもなく「パレットナイフ」と題された不木の脚本が喜多村のもとに届く。しかし——

読んでみると、実に、舞台は新派のそれである。甚だ拙なるものといへる。／＼言葉の不用意といつたらぬ。構想も、いつもの小酒井（言葉は、いつもうまくない

が)氏の書くべき医学上の問題をとりあつかつたものでないのが第一に飽きたりない。／出来るだけよく理解して猛烈に訂正を加へた。(『日記』同月二十日条)

この時期の『日記』には新派の現状に対する憂慮が散見し、探偵小説ひいては大衆文芸との接点を状況打破の新手と考えていた節もある¹⁴。期待値の高さゆえの不満とでもいおうか、喜多村は翌日も脚本の改訂に専心し、八月二十二日には名古屋へ赴いて、料亭の寸楽園で不木と会見している。その場で、喜多村が不木に「脚本について突込んで質問をすると、結局、プランを立てて潮山(長三)¹⁵と云ふ弟子のやうな男に書かせたと云ふ訳であつた」(『日記』同月二十三日条)。

この舞台には主催者側の弁護士連中の他、地元の俳優たちを中心に、新派俳優の山田九州男や日活の映画俳優——小泉嘉輔、宮部静子、西條香代子、衣笠みどり他——が特別出演したものの、総体として「素人芝居」(『日記』同前)も同然だった。当初は喜多村も出演を期待されていたが演出に徹し、相当骨を折って稽古をつけたようだ。

八月二十六日に末広座で初日を開けると「国民各自が義務として負はねばならぬ陪審員とはどんなものか又従来の

刑事裁判に国民の意志(有罪無罪)が直接に注がれ判決を決定せしめる我が国刑事裁判上に一大変革を及ぼすと云ふ裁判振を見んものと深くも興味をそゝり」(無署名「すばらしい人気 陪審法の宣伝劇 末廣座の「パレットナイフ」高橋控訴院長等も熱心に見物」『新愛知』一九二六年八月二十七日朝刊)、昼夜二回興行で三十日までの四日間、連日大入であつた。その劇の筋¹⁶はどのようなものだったか。右の『新愛知』記事を引きながらみていこう。

名古屋の東郊八勝館を背景にして芸妓屋の女将お道が姪の秀子と恋仲である若い洋画家田中を手に入るとして秀子を某会社員に嫁入らすべく魂胆をめぐらし三百円を餌に到頭田中を我物にしたので失恋の秀子が／＼結婚を嫌ひ大阪へ逃げやうとする時画家の田中も秀子と共に駆落ちの約束したが偶々秀子への結納金三百円をお道方へ持参されたのを同夜何者か忍び入窃取せんとしてお道が声を立てたので田中が片身に残して置いたパレットナイフ(絵の具ときナイフ)でお道は殺害されたので遂に田中は強盗殺人の嫌疑で捕へられ裁判へと引かれたのであつた (同前)

幕間で陪審法に関する解説があり、弁護士側が調書等の裁判記録を作成した模擬法廷の場になると、前掲三派の弁護士が日替わりで出演し、裁判長、検事、弁護士、陪審員を演ずるといふ趣向である。

裁判所長より陪審員に対し被告田中は殺人罪を犯したもるか否かを付問する事になり陪審員一同は退廷し協議を凝らした上再び入廷し陪審員長より然らずと云ふ（無罪）の／答申があつて拍手を呼び返し幕で本物の犯人が逮捕されると云ふ事で所謂陪審員の判断が正確である事が立証され国民の意志が即ち裁判を決した事になつたのであつた（同前）

吉田生「宣伝劇雑感」「パレット・ナイフ」を見て」（『名古屋新聞』一九二六年八月二十八日朝刊）は、不木が「単に芸術家といふ小さな立場に拘泥することなく、もつと広い意味での社会的立場から、此の仕事の性質と使命を考へて仕事を引き受けた姿勢を評価する。そして、その「作劇術の巧妙なこと、まづ満点に近いものといふことができ。陪審法廷にいたる前二幕は多分の探偵趣味をふくんだ一般大衆向きの芝居で、毫も宣伝臭無く、法廷の場になつ

て事件がハッキリと解決される、第二幕から第三幕に移る場面転換は実に鮮やか」と、やや大仰ともとれる絶賛ぶりである。喜多村が脚本にずいぶん手を入れたらしいこと、また好意的な各報道と対照して『日記』に綴られた忌憚のない思い¹⁶も留意すべきだが、時事的な話題性も相まってこの興行は盛況裡に幕を下ろした。

喜多村は「在来の探偵劇が何れも荒唐無稽であつたといふのはその小説又は脚本が雑ばく、く、な」（傍点原文）ためだったが、近年「科学的となり更に創作としての探偵劇さへ行はるる傾向になつて」おり、この陪審法宣伝劇も不木の新作だから演出を担当したのだと述べている（『俳優一家言』『名古屋新聞』一九二六年八月三十日朝刊）。同年末、不木が新守座の文芸部員の依頼で「紅蜘蛛奇譚」を執筆したのは、おそらく「パレット・ナイフ」からの流れであろう¹⁷。そして翌年、喜多村は不木の「紅蜘蛛奇譚」を河合武雄と合同で上演するなどしだいに交誼を深め、名古屋へ行けば御器所町の不木宅を訪ねるような関係になつていく。

小酒井氏の書齋にみると、いつみても、「人間椅子」を感じられる、偉大な椅子を見る。今日はそれにかけると、大分に「バネ」がゆるんでゐた。

〔『日記』一九二七年十一月二十五日条〕

喜多村に乱歩の「人間椅子」〔『苦楽』一九二五年十月〕を想起させた、不木の「偉大な椅子」については、乱歩も「いつも無遠慮に居心地のよい脇掛椅子を選んだ」（『脇掛椅子の凭り心地』『新青年』一九二九年六月）と回想している。

喜多村は乱歩の愛読者でもあった。一九二七年九月には乱歩を訪ね、そのときの印象を「瘦せて神経質であるやうに思つた予想は裏切られて、肥つたまあ好い男だが、やゝむくんであるやうな血色の少し悪いやうに思はせられる」（『日記』一九二七年九月十日条）と書いているが¹⁸、こうした作家たちとの邂逅を、喜多村は殊のほか喜んでゐる。

土師に会ふ。小酒井、に会ふ。国枝に会ふ。かくも、ある機会の来る事を、歓迎しずにはゐられない。／佐藤紅緑が、三人（伊井、河合、自分）へ何か書くといつて居たといふ噂。国枝史郎氏が、送つてきた脚本。大衆作家のこの脚本、新派も存在はみとめられてゐる。〔『日記』同年十一月二十八日条〕

自身の嗜好もさりながら、探偵小説ひいては大衆文芸の隆盛や、彼ら新しい作家たちの存在が新派にとって重要だという自覚が喜多村にはある。そして前述のように、喜多村と不木の交流を契機として、一九二七年十一月、耽綺社が結成されたのである。

三 耽綺社と探偵劇

耽綺社の同人は毎月一回、不木が住む名古屋に参集し、合作小説・脚本を執筆した。本稿では脚本に焦点をあてることが、基本的に不木が骨子を考え、それに他の同人が肉付けしていくという方式だった。不木は、かねて喜多村と約束していたとおり、第一作を探偵劇創作と決め、不木、長谷川、国枝、乱歩が出席した最初の会合で創案された第一回作品として合作脚本「残された一人」（『サンデー毎日』一九二七年十二月十八日）を発表¹⁹、執筆にあたっては喜多村も打ち合わせに参加し、合作者の一人に連なっている（「残された一人」新守座上演について）『名古屋新聞』同月十六日朝刊²⁰。同作は一九二八年（昭和三）一月、名古屋の新守座で伊井蓉峰と喜多村の一座によって上演された。

当月の興行は「お鯉物語」、「婦系図」の内「湯島境内」、

「討入の夜」(一〜八日)で幕をあげ、二の替り(九〜十五日)に大佛次郎原作「地雷火組」、橋詰みを子原作「弱者」(『名古屋新聞』連載小説)、三の替り(十七〜二十二日)に桜井芳次郎作「芸者」、耽綺社合作「残されたる一人」、中村吉蔵作「嘲笑」といった演目が並んだ。耽綺社から伊井蓉峰、喜多村緑郎へ「珍らしい凶案の引幕」(『演芸』『名古屋新聞』一九二八年一月十三日朝刊)を贈り²¹、二の替りと三の替りの間——九月十六日を休場して不木、国枝も立ち会いのもとで舞台稽古を行なった(『芝居とキネマ』『新愛知』同月十六日朝刊)。

中京劇壇の初春興行は各座の成績いずれも芳しからず、新守座も二の替りで打ち切りという声もあったが、興行主の木内興行部は続演を決定。舞台稽古の場で不木は「もし「残されたる一人」が不評判とすれば大衆文芸の価値にも関する重大なる死活問題であるし且新派の生きる新しい道をも閉塞するもの」と言明し、千枚の短冊に「新派復興の自詠歌」を揮毫して特等の観客に贈呈する旨を申し出た(無署名「千枚の短冊に／小酒井博士が自詠句を執筆 伊井喜多村ら新派のために」『新愛知』同月十七日朝刊)²²。初日は長谷川伸、土師清二も来名し、不木、国枝とともに観劇。十八日夜には、四人に『サンデー毎日』編集長の

渡辺均をくわえて、喜多村と宴席を囲んだ(『日記』同月十八日条)。翌日、喜多村は、耽綺社の作家たちとの話から「駄目を拾つて」(『日記』同月十九日条)舞台の修正を図つたという。

ちなみにこの十八日、耽綺社の面々は、渡辺均から『サンデー毎日』の増刊号に、六大都市(東京、名古屋、大阪、神戸、京都、横浜)を舞台に地域色のある小説の執筆を依頼され、不木が乱歩へ企画概要と原稿執筆に関する書簡を送っている。

これについて長谷川氏が上京の上訪問されて話されます。〔略〕一寸御耳に入れて置いて委細は長谷川氏が申伝へられます。若し手術のために執筆不可能でしたら、その時のことも長谷川氏と相談して置きました。／本日、曾我家五九郎のための喜劇(一幕三場)を合作しました。昨日までかゝり明夜長谷川氏は帰京されます。(一月十九日付書簡)²³

「手術」というのは、この頃に乱歩が受けた扁桃腺剔出手術のことで、一月末に下谷黒門町の高橋病院に入院している(二月十日退院)²⁴。長谷川伸は二十一日朝に帰京し、そ

の午後には『サンデー毎日』からの原稿依頼について相談すべく乱歩宅を訪れたが、乱歩が眠っていたため手紙を預けて帰った。乱歩の執筆が叶わない場合は、当時『新青年』の編集長だった横溝正史に代作を依頼するという不木との取り決めなどが書簡には記されている「書簡④⑤」。この件については、同時期の乱歩宛不木書簡群（前掲『子不語の夢』を合わせてみることで、より詳細な状況を把握できる。また前掲一月十九日付不木書簡にある「曾我の家五九郎のための喜劇」とは曾我廼家五九郎劇団にあてた合作脚本「ジャズ結婚曲」（『週刊朝日』一九二八年三月十一・十八日に分載）で、同作はこの年の三月、浅草に新築された昭和座のこけら落としとして上演された。

その後、同年八月の新橋演舞場では、耽綺社の合作「無貧清風」（雑誌等未掲載カ）、広津和郎作「妻」、中村吉蔵と大関格郎の合作「緞原敬」、長谷川伸作「舶来巾着切」（『大衆文芸』九月）を伊井蓉峰一座が上演した。本門佛立宗の信者から委嘱を受けた「無貧清風」は²⁵、同宗の開祖日扇上人（長松清風）を題材に序幕を長谷川伸、二幕目を平山蘆江、三幕目を二人が合作し、稽古にも両名が立ち会った。長谷川伸は自作の「舶来巾着切」が併演されることもあり、乱歩に観劇希望日の伺いを立てている「書簡⑥」。

同時代評のひとつ、相馬劍爾「演舞場評 おもしろい舶来巾着切」（『読売新聞』一九二八年八月十二日朝刊）を参考に評判をみてみよう。まず「無貧清風」については「六大大衆作家の合作、おとなしく見て居ると、腹立たしくなる芝居で、利生記式のものだが、斬合が始まる度にお題目が出てくるていもの」と芳しくない。「妻」と「原敬」についても一層の工夫が求められている。その中で「面白いのは長谷川氏の「舶来巾着切」である、白人の掏摸に荒されるのを憤った二人掏摸がこの白人退治に競争する筋だが、チブヤ女なども絡んで、面白い色気が出て居る」と、長谷川伸の作品は好評であった。

耽綺社の合作脚本は、六人の作家が名を連ねる点で話題を呼んだが、舞台そのものに対する評価は比較的低調である。とはいえ、探偵小説ひいては大衆文芸と同時代の演劇が接点を求める機運が醸成されていた大正末期から昭和初期において、耽綺社の果たした役割はけっこう小さい。たとえば、乱歩と長谷川伸は耽綺社の会合時に定宿の大須ホテルで「枕をならべて、よく寝物語をした」（『探偵小説四十年（上）』三二二頁）という。

同氏「長谷川伸」はちょうどそのころ、創作上の転換

期にあって、やや筆の進まぬ時代であった。「小説では
どうも一般に受けるものが書けないから、脚本の方に
進もうと思っている」などという真剣な話も出た。そ
れから二三年たつと、果して彼は日本一上演数の多い
劇作家になりすましていた。

(同前)

当時長谷川伸は戯曲を十数篇発表しており、一九二六年
十二月に「世に出ぬ豪傑」(『大衆文芸』六月)を井上正夫
が浅草松竹座で初演したのを皮切りに、翌年「仇討人」
(『大衆文芸』一月)と「柄杓酒」(『大衆文芸』三月)が歌
舞伎俳優によって上演されたが、劇作家として本格的には
立っていなかった²⁶。

転機となったのは澤田正二郎率いる新国劇との出会いで
ある。一九二八年四月、澤田が「掏摸の家」(『騒人』三月)
を市村座で初演し、十二月には「杵掛時次郎」(『騒人』七
月)の帝国劇場上演が成功を収め、これによって劇作家と
しての声価を高めた²⁷。長谷川伸の文業が確立されるプロ
セスにおいて、耽綺社という場に所属していたことの意味
は無視できないだろう。一九二九年(昭和四)三月に澤田
正二郎が急逝すると、長谷川伸は、不木を新国劇の俵藤丈
夫に引きあわせ、名古屋における追悼講演会(三月二十七

日)での講演を依頼している。当日、不木は体調不良のた
め欠席し、草稿の代読という形になるのだが、長谷川伸が
不木と新国劇との仲介役を買って出たのは、不木をより劇
壇に接近せしめんとする意図からではなかったか²⁸。

しかし、それから数日後の四月一日、不木は急性肺炎の
ために不帰の客となる。三十九歳の若さであった。不木の
死後、残された耽綺社の同人は乱歩を中心に、不木全集を
刊行すべく奔走する。当初は春陽堂が版元として候補に挙
がっており、編集者の島源四郎²⁹と長谷川伸が会談したり、
和田利彦社長らが名古屋の小酒井家に赴いたりと企画を進
めていた。しかし春陽堂では、一九二八年十二月に脑梗塞
で急死した小山内薫の全集を刊行する予定³⁰もあってか
「書簡⑧」、改造社から『小酒井不木全集』全十七巻(一九
二九〜一九三〇年)が出ることに決まる³¹。

不木のいない耽綺社に、日活から土師清二を介して「警
視庁後援」による合作映画のシナリオ執筆依頼があった。
監督は阿部豊(ジャック)。一九二九年六月下旬、同人は不
木の墓参を兼ねて名古屋で打ち合わせをし、その際には、
不木全集の一卷を墓前に捧げている「書簡⑩」⑭。この映
画は『非常警戒』と題され、結果的に耽綺社の最後の大き
な仕事となったようだ(『探偵小説四十年(上)』三一九

耽綺社自体は、不木の死によつて自然消滅に向かうのだが、長谷川伸は個人的にも探偵小説と演劇の接続に積極的で、そのつなぎ役として乱歩に期待を寄せていた。書簡⑩には雑誌『演芸画報』の野村元基(無名庵)による取材許可を求め、自書の紹介状を持たせる旨が記されている。これは同誌一九二九年七月号の特集「芝居の探偵趣味研究」のためと思われるが、岡本綺堂、長谷川伸、濱村米蔵、甲賀三郎らが並ぶ実際の誌面に乱歩の名前はないから、取材を断つたようだ。そのフォローの意味もあつたのだろうか、長谷川伸の談話「本格の探偵趣味劇」では乱歩について幾度も言及している。いささか長くなるが、冒頭の段落を引いてみよう。

探偵小説も到頭一般的大衆的に歓迎される時代が来た。演劇にも映画にも、その趣味を取入れた戯曲が流行する事であらう。ところで、探偵小説作家も多数居るが、その中で一番傑出もし、有名でもある江戸川乱歩君の、非常に好きな芝居に『毛抜』がある。同君は斯うした古典的な劇の中には、随所に探偵趣味の横溢してゐること、尚且、此種の古いものに、ユーモアが

豊富に含まれてゐると同じ程度だといふ事をよく云つてゐる。自分もこの説には同感である。その中でも『毛抜』は実に面白い。これは歌舞伎十八番の一であるといふよりは、寧ろ古典探偵趣味劇として尊重し度いと江戸川君は云つてゐた。この批評は外れて居ないと思ふのである。

乱歩が歌舞伎十八番の「毛抜」を好み、それを「古典探偵趣味劇として尊重し度い」としている点は興味深い。また長谷川伸は談話のなかで、先駆的に探偵劇を執筆、上演した小酒井不木の功績を称え、失われた将来的な可能性にも言及しながら、その早すぎる死を惜しんでいる。不木亡き後、乱歩への期待は一層高まつたにちがいない。

自分の知人中では、江戸川君が最もそれに適した素質を持つて居るから、屢々同君に探偵戯曲の劇作を勧めてゐる次第だが、大事を取つてゐるのか、感興が湧かないのか、未だ執筆を見るに至らないが、将来はきっとこの人あたりが、理想的なものを発表する事だらうと思ふ。

(「本格の探偵趣味劇」)

長谷川伸は、書簡⑩で「江戸川氏を狙ったのは小生でなし『演藝画報』です」と、いささか言い訳めいた一文を挿んでいるが、その後「探偵戯曲を書く気はまだ起りませんか」と続けて書信を締めくくっているところからも、乱歩を探偵劇の書き手に引きこもうという意志がうかがえるのである。

四 市川小太夫と「黒手組」

長谷川伸の勧めにもかかわらず、乱歩自身は劇作に手も染めなかつたのだが、一九三一年（昭和六）七月、歌舞伎俳優の二代目市川小太夫によって、その小説が初めて舞台化された。二代目市川猿之助の春秋座を脱退した小太夫は、自身の劇団新興座を旗揚げ。その第一回興行（帝国劇場、七月二十六～二十八日）で、平山蘆江作「吉備津の釜」（『大衆文芸』八月号）、長谷川伸作「源太振袖勝負」（同前）、「色彩間菟豆」とともに、小太夫がコナン・ドイルをもじつた小納戸容の筆名で乱歩の「黒手組」（『新青年』一九一五年三月。脚本は平凡社版『江戸川乱歩全集』第四巻の附録冊子『探偵雑誌』第四号、一九三一年）を脚色上演したのである。

自ら探偵小説の創作も手がけて「探偵小説は三度の飯よ

りも好き」（『私と探偵小説』『ぶろふいる』一九三三年九月）という小太夫が乱歩作品の劇化を発想するのは自然な成り行きであつたといえよう。小太夫は「利にさとい興行師が何故、探偵小説の演劇化を見逃してゐるんだらう、まして我江戸川乱歩氏の如き大文豪を、この疑問が新興座の旗挙げに黒手組を選んで乱歩氏の作を汚した訳なんだが」（『黒手組ロケーション記』、『貼雑年譜』貼付の新聞記事。傍点原文）云々と上演に至るいきさつを語っている。「探偵小説の演劇化」は興行としても十分利益が見込めると小太夫は考えていた。そんな小太夫を乱歩に紹介したのが、長谷川伸であつた「書簡⑩」。

前述したが、一九二九年三月に澤田正二郎が「杳掛時次郎」再演中に急逝すると、新国劇は若き島田正吾と辰巳柳太郎を立てて再生を図つた。同年六月の新橋演舞場公演で市川小太夫に加入を乞い、真山青果や長谷川伸の作品などを上演したが、客足は伸び悩んだ。澤田没後の新国劇を後援していた長谷川伸は同年八月の帝国劇場公演のために「関の弥太っぺ」（『サンデー毎日』八月）を書き下ろしたものの、主役の弥太郎を演じることになつた辰巳が大役の重圧や劇団員との確執から失踪。急遽小太夫が代役に立つたものの、生え抜きの劇団員との関係が当初から良好でな

かった小太夫はこれを潮に新国劇を去ってしまう³³。しかし、すでに前掲の「仇討人」と「柄杓酒」に出演していた小太夫は³⁴、新国劇の縁で長谷川伸と親交を深め、乱歩への仲介を頼んだのだろう。

乱歩からの許可を得た小太夫は「黒手組」の脚色に着手する。その後、作中にはがきに隠された暗号が舞台化する。とわかりづらくなるため平易にしたいという小太夫からの要請も長谷川伸が取り次いでいる「書簡^⑬」。実際に乱歩が小太夫と会ったか、書面で対応したかは定かでないが、乱歩は「原作のつたないこと、甚だ芝居に不可な事を知りながら、上演者が小太夫氏であるが為め少なからぬ興味を以て、脚色上演を快諾した。脚色については、仮令原作を以しても舞台の生きる様、思ふ存分書き改められる様お願ひして置いた」(「原作者の言葉」初演パンフレット)と述べており、自由な脚色を認めていた。

参考のために、原作の暗号と脚色されたものを並べてみよう。まず原作を、次いで脚本版を引く³⁵。

一度おうかがいしたいと存じながらつい
好い折がなく失礼ばかり致しております
割合にお暖かな日がつづきますのね是非

此頃にお邪魔させていただきますわ扱日
外×つまらぬ品物をお贈りしました処御
叮嚀なお礼を頂き痛み入りますあの手提
袋は実はわたくしがつれづれのすさびに
自×ら拙い刺繍をしました物で却ってお
叱りを受けるかと心配したほどですのよ
歌の方は近頃はいかが？時節柄お身お大
切に遊ばして下さいまし さよなら

待に待ったお約束の日
殊に天気もよく新鮮な
木々の芽生農家の庭に
牝×牛の眠りも静かに
列を作って先頭に進む
椎津さんの元気な笑声
川×村さん森さん私と
朴訥な田舎の面白さに
沈む日も忘れたほどよ
清子さんの不参は残念
多摩川にて親友より
金森清子様

原作の暗号は、各行の一字目の漢字を拾って偏と旁に分け、偏の画数を五十音の子音の順序に、旁の画数を母音の順序に当てはめて解読する。二か所の「×」はその上の字の濁音を示している。脚本版もほぼ同様だが、偏と旁の画数を十の位（偏）と一の位（旁）として数字化し、それをいろは四十八字に置き換えることに若干変更している。ト書きをみると、舞台の照明を落とし、暗号文を映像で観客に見せながら謎解きをする工夫をしていたようだ。

件の暗号の処理に関する注文等もあったが、新聞劇評は概ね好評。喜多村緑郎はその月の帝劇興行を通して「黒手組」が「一番の出来だ。よく、あゝ生かしたと思つて小太夫自身の脚色であることを敬服した」と日記（一九三一年七月二十八日条）³⁶に書きとめている。

次いで小太夫は乱歩の「陰獣」（『新青年』一九二八年八月十月。脚本は『ぶろふいる』一九三三年九月十一月）を脚色・演出し、翌年十二月の新橋演舞場で上演した。甲賀三郎が「原作発表」当時この作品が劇化されようとは、誰しも予期しなかつたであらう。一見それは至難の事に思へたからである。然るに最近市川小太夫君が、見事それを劇化して、成功に近いものを演出した。小太夫君の勇氣と努力とに敬服せざるを得ない」（『劇化された陰獣』『読売新

聞』一九三三年十二月二十一日）と評したように、前作「黒手組」に続く好評を以て探偵小説界、演劇界に迎えられた。一九三三年に新興座は解散し、小太夫の探偵劇上演は休止するのだが、神山彰が指摘するように、小太夫は「近代演劇」を多面的に論じる際には、多くの頁が割かれてもいい俳優の一人であろう」（『近代演劇の「記憶遺産」——「今は用なき過ぎ去りしもの」」、神山彰編『忘れられた演劇』森話社、二〇一四年）。

喜多村緑郎と小酒井不木がめざした、探偵劇による新派復興。市川小太夫は江戸川乱歩の小説を劇化することで歌舞伎の新境を開拓しようとした。大正末期から昭和初期にかけて、新派や歌舞伎の有力な俳優——彼らはともに探偵小説の愛好家だった——が、同時代の探偵小説と切り結ぶことでそれぞれのジャンルの革新を企図していたことは、ひろく文学と演劇の関係を考える上でも看過すべきではない。そうした中で、長谷川伸が劇作家としての地歩を固めていった過程が、本稿で翻刻・紹介する書簡群とその周辺の状況を検討することで浮かび上がってくる。

また敗戦直後の書簡⑧をみると、乱歩から『石榴』（柳香書院、一九三五年）³⁷を送られた際、長谷川伸は二十一日会の頃や京都滞在中——作家としての模索期であった「不振

の時代」を回想しており、長谷川伸にとって重要な時期に乱歩との交流が深まっていた様子がうかがえる。乱歩宛長谷川伸書簡群は、同時代の演劇・文学状況を炙りだすだけでなく、長谷川伸研究においても有効な資料となるにちがいない。

五 江戸川乱歩宛長谷川伸書簡

江戸川乱歩宛長谷川伸書簡は、平井家蔵・立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター寄託資料（全十八通）を翻刻した。すべての書簡に便宜上の通し番号を付して時期順に配置した。改行は原文ママ。挿入文は「」で本文中に該当箇所に加え、ミセケチは該当箇所の上に線を引き、塗りつぶしてある文字は■で表記し、一行アキは省略した。判読できなかった文字は□で表記した。難読の文字も多く、大方のご叱正を乞う。

書簡① 一九二六年（大正十五）一月十二日【封書】

拝啓

貴著「屋根

裏の散歩者」

御寄贈被下

有難く存じ申

候

東京住居の噂頻り

に候やがて廿一日會

例會毎にお目に

かゝれる事と樂み

居り候

先はお礼まで

一月十二日

長谷川伸

江戸川乱歩様

【消印】 15-1.12

【宛名】 大阪市外守口町 平井氏 江戸川乱歩殿

【差出】 一月拾貳日 東京市外大崎町桐ヶ谷八二九

長谷川伸

書簡② 一九二六年（大正十五）十月八日【封書】

拝啓

先日はおくやみ状をくだされ有難く存
じます。

あゝいふ時とはいへ、「探偵趣味」の為に
一寸のお役もつとめず、申訳ありません。
その中に、心がけてあるもの一つこれ
あり、差しあげたいと存じてゐます。

先はお礼まで。 長谷川伸

十月八日

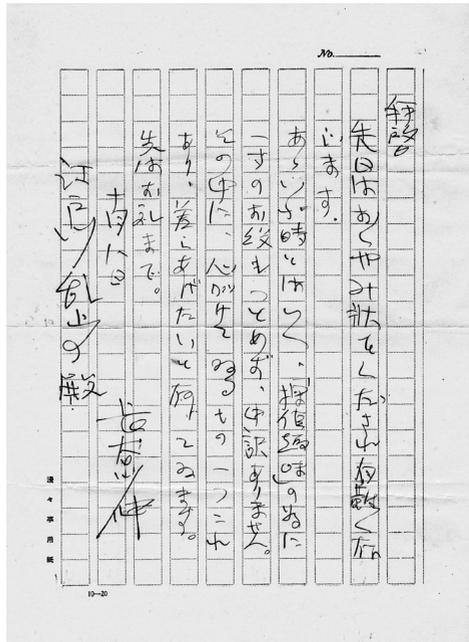
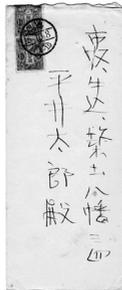
江戸川乱歩殿

【消印】 品川15.10.8

【宛名】 市内牛込築土八幡三四 平井太郎殿

【差出】 十月八日 東京市外大崎町桐ヶ谷八二九

長谷川伸



拝啓

山下氏よりも消息があつたので病

臥せらるゝ由承知いたしをりました

上、お手紙をいたゞき、よくく分明い

たしました。

病床を訪れるのも心ないわざと思ひ

差控へてゐます、もし、何か便すべ

き用務もあらば労力でも何でも惜み

ません、山下氏がついてゐるから安

心とは存ずるものゝ、氣になると申

あげて置きます、

もし淋しさを感じるやうなら遠慮

なくいつて下さい、昼でも夜でも愚談

をしに行きます。

十月三十日朝 長谷川伸

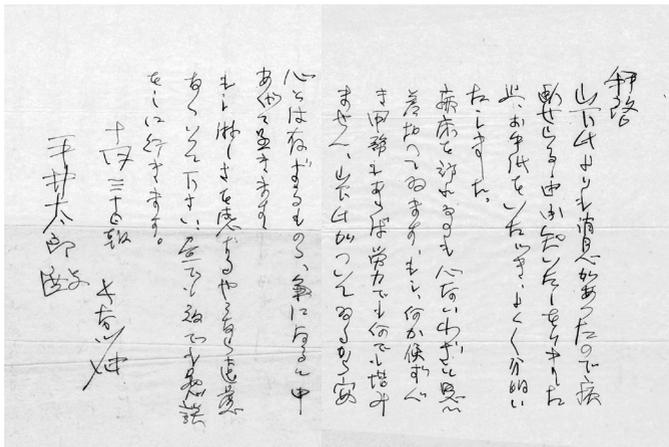
平井太郎殿

[消印] 2.10.30

[宛名] 市内丸太町大橋西詰 山水館内

平井太郎殿

[差出] 東山五條川瀬小路 長谷川伸



拜啓

二十一日朝着京、貴宅を午后訪問いたし候ところ

折柄よく睡つてゐられるといふので起すに^{ママ}のびが

たく手紙と袋筒一ケを残し立去り申候が、途中、小生

の与へられたる使命を果〔さ〕ざる體^{うづ}みに耐へがたく、

貴宅に残したる文中の一齣——不木氏の案なる

横溝氏代作——を蘇生さすべく俄に博文館に

横溝氏を訪ひ、懇談(すべてを打ちあけ)いたせ〔し〕上

■左の條件にて承諾いたしくれ候。

江戸川氏の名によつて作品発表について江戸川氏

に■對する名前を借す件一切は長谷川の責任

とする事。

期日は二十五日。「六大都市物語」。名古屋(小酒井氏)京

都

(渡辺均氏)横浜(長谷川)神戸(横溝氏)東京(國枝

史郎氏)大阪(江戸川氏)といふ役割にて、火急なれば

過半日をこの事に没頭いたしるはよけれど、ここに

に難儀なるは前記一ケ條に候。

右、一ケ條〔について〕は不日、小酒井氏よりも一書ご座

右に

拜啓

二十一日朝着京、貴宅を午後訪問いたし候ところ

折柄よく睡つてゐられるといふので起すに^{ママ}のびが

たく手紙と袋筒一ケを残し立去り申候が、途中、小生

の与へられたる使命を果〔さ〕ざる體^{うづ}みに耐へがたく、

貴宅に残したる文中の一齣——不木氏の案なる

横溝氏代作——を蘇生さすべく俄に博文館に

横溝氏を訪ひ、懇談(すべてを打ちあけ)いたせ〔し〕上

■左の條件にて承諾いたしくれ候。

江戸川氏の名によつて作品発表について江戸川氏

に■對する名前を借す件一切は長谷川の責任

とする事。

期日は二十五日。「六大都市物語」。名古屋(小酒井氏)京

都

(渡辺均氏)横浜(長谷川)神戸(横溝氏)東京(國枝

史郎氏)大阪(江戸川氏)といふ役割にて、火急なれば

過半日をこの事に没頭いたしるはよけれど、ここに

に難儀なるは前記一ケ條に候。

右、一ケ條〔について〕は不日、小酒井氏よりも一書ご座

右に

参らる事と存じ候へども、小生は小生の責任——潜越なるを殊に万謝す——を果す為には詫証文をも書き申すべく候。

只今帰宅、氣がすまざれば一書を急ぎ参らせ候。何分ともに黙認をそひたくと存じあげ候。

いづれ拝眉、披瀝いたすべく候。

二十一日夜

長谷川伸

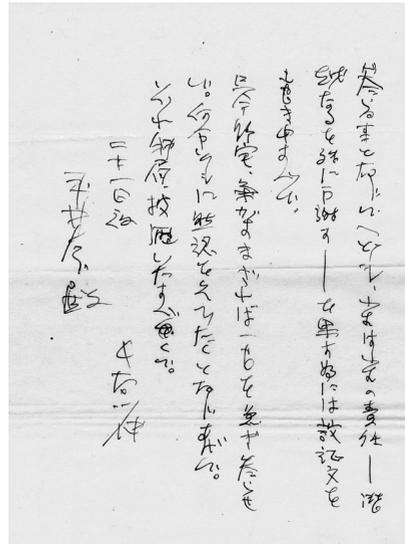
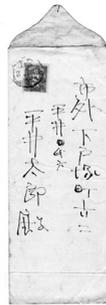
平井太郎殿

〔消印〕 3.1.22

〔宛名〕 市外下戸塚町六二 平井氏方 平井太郎殿

〔差出〕 一月二十二日 東京市外大崎町桐ヶ谷八二九

長谷川伸



書簡⑤ 一九二八年(昭和三)二月二十一日【封書】

ご病氣いかゞ小酒井氏

國枝氏土師氏様子知

れず心配いたしをり候。

「サンデ」毎日」渡辺

氏名古屋に來り耽

綺社五人(土師氏は丁髷物)

に横溝氏、江声川氏渡

氏を加へ「六大都市物語」

を書く事を頼まれ

話は勢ひの為に貴下

の病氣を知りつつ執

筆を托され候。

到底執筆は駄目と

■想像し横溝氏に代

作を乞ひ貴下の名

を借りては(小酒井氏

案)とも申合ひいたし

候。

しかし病状を知りつつ

煩はしき事申あげ

ご病氣いかゞ小酒井氏
國枝氏土師氏様子知
れず心配いたしをり候。
「サンデ」毎日」渡辺
氏名古屋に來り耽
綺社五人(土師氏は丁髷物)
に横溝氏、江声川氏渡
氏を加へ「六大都市物語」
を書く事を頼まれ
話は勢ひの為に貴下
の病氣を知りつつ執
筆を托され候。
到底執筆は駄目と
■想像し横溝氏に代
作を乞ひ貴下の名
を借りては(小酒井氏
案)とも申合ひいたし
候。
しかし病状を知りつつ
煩はしき事申あげ

るにしのびず、只
今歸途に打電
いたすべく候。
来意のみ申のべ
候。

ご加療を探偵小
説界の為め耽綺社の為祈り
申し候。

長谷川伸

二十一日午后

江戸川乱歩盟兄

【同封別信】

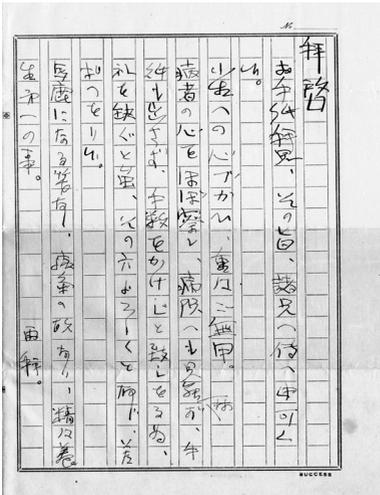
拜啓

お手紙拝見、その旨、諸兄へ傳へ申可く

候。

小生への心づかひ、重々ご無用。

病者の心をほぼ察し、病院へも見舞〔は〕ず、手
紙も出さず、手数をかけじと致しをる為、
礼を缺くと虫、その方よろしくと存じ、差
控へをり候。



馬鹿になる筈なし、病氣の故なり、精々養生第一の事。再拜

二月廿一日 長谷川伸

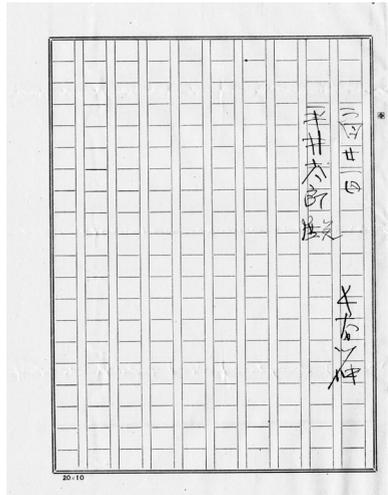
平井太郎殿

〔消印〕 3-21

〔宛名〕 市外下戸塚町六二 平井太郎殿

〔差出〕 二月二十一日 東京市外大崎町桐ヶ谷八二九

長谷川伸



書簡⑥ 一九二八年(昭和三)七月二十六日【封書】

拜啓

「日扇上人」は『無^{ムトシ}貧清風』と名題を据ゑる序幕は小生、二幕目は平山氏、三幕目は平山氏小生合作にて脚色し稽古が二十五日より始り小生平山氏立會ひ進行いたし居り候。そんなにつまらなくはなく候。見物日はいつでもいいですか、もし日に希望があれば平山氏まで申されたく候。

小生の『舶来巾着切』もそのついでにご一見煩はしたく候。

長谷川伸

七月二十六日

江戸川乱歩殿

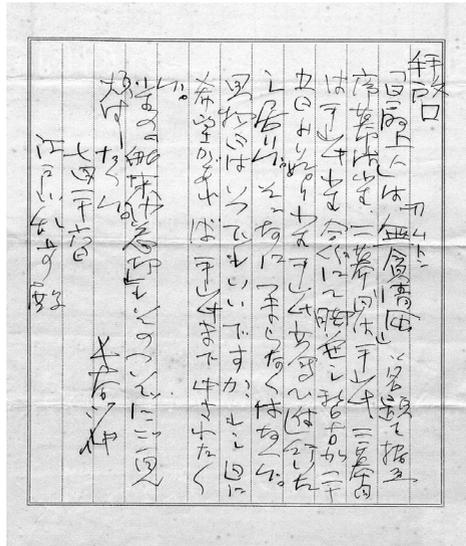
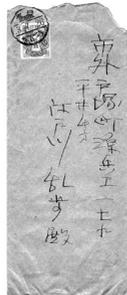
〔消印〕 白金37.26

〔宛名〕 市外戸塚町源兵エ一七九 平井氏方

江戸川乱歩殿

〔差出〕 七月二十六日 東京市外大崎町桐ヶ谷八二九

長谷川伸



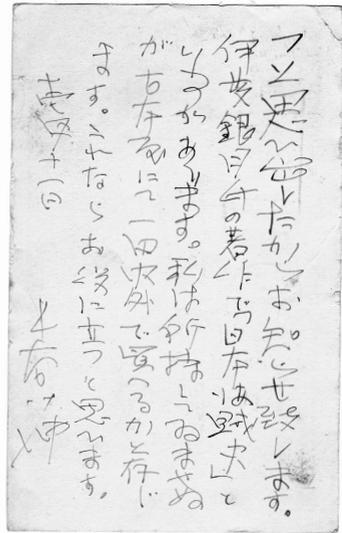
書簡⑦ 一九二九年（昭和四）一月十一日【葉書】

フと思ひ出したからお知らせ致します。
伊藤銀月氏の著作で「日本海賊史」といふのがあります。私は所持してゐませぬが古本屋にて一円内外で買へるかと思ひます。これならお役に立つと思ひます。

壹月十一日 長谷川伸

【消印】 白金十一

【宛名】 市外戸塚町源兵エ一七九 平井太郎殿



拝啓

四日夕刻銀座にて春陽堂の島

源四郎氏に出會、これ幸ひと故小酒

井不木氏の全集の極く大要を摘

んで語り、委細は江戸川乱歩氏より聞

かれたしと申あげ置き候。不日、全

氏より何かと申す可きかと存じ候。

名古屋へは和田利彦氏参りし由、も

つとも〔三日〕朝七時半東京発なれば夜に

入りて小酒井氏邸へ到りしものならんと

存じ候、〔四日〕歸京したる由、二日に

は今井氏が行きし由、駈けちがひし

にや逢はずに終ひたる訳に候。土

師、國枝氏は今井氏と和田氏も顔を

知らぬ故、判らざりしならんか。

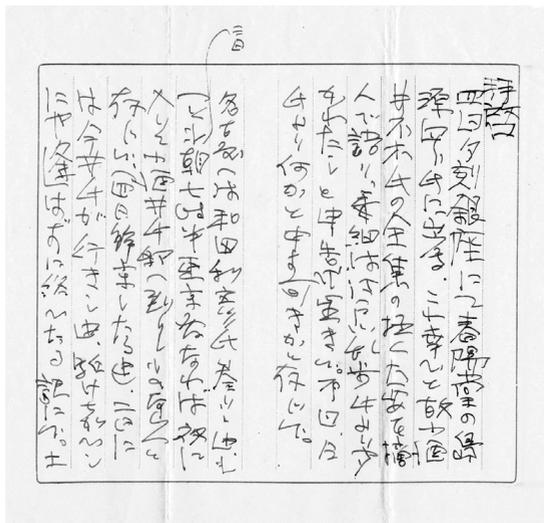
春陽堂は小山内氏の全集を出す

由、八冊なりといふ。會議をするとか

云ひ居り候。まさに不木全集をやり

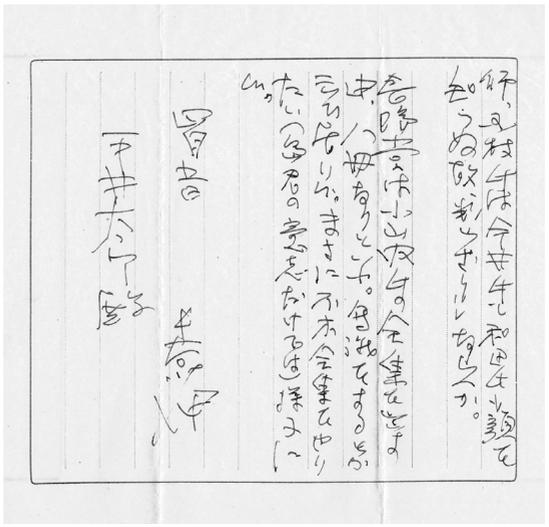
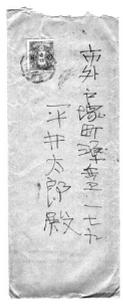
たい（島君の意志だけでは）様子に

候。



四月五日
平井太郎殿
長谷川伸

[消印] 445
[宛名] 市外戸塚町源兵エ一七九 平井太郎殿
[差出] 四月五日 長谷川伸
東京市外大崎町桐ヶ谷八二九



書簡⑨ 一九二九年（昭和四）四月十日【葉書】

拝啓

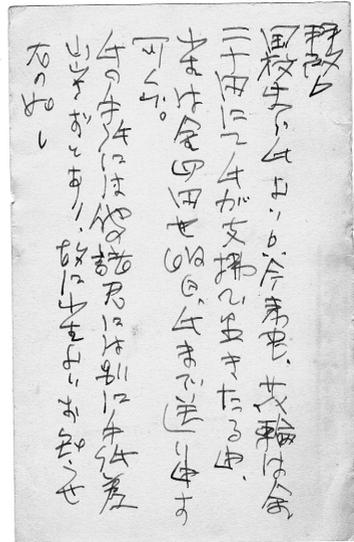
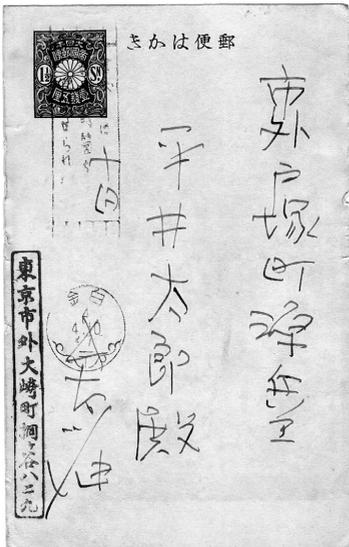
国枝史郎氏より只今来書、花輪は金二十円にて氏が支拂ひ置きたる由、小生は金四円也明日、氏まで送り申す可く候。

氏の手紙には他の諸君には別に手紙差出さずとあり、故に小生よりお知らせ右の如し

〔消印〕 白金4.10

〔宛名〕 市外戸塚町源兵エ 平井太郎殿

〔差出〕 十日 東京市外大崎町桐ヶ谷八二九 長谷川伸



拝啓

野村元基氏といふ人があなたの談話を伺ひに出たいと申します、『演藝画報』の為にです、彼は客員みたいな位置にゐるのです。

談話は『探偵小説と演劇』といふやうなものなのです、探偵小説は映画ばかり云々するが、劇の方も云々すべきだと信じてゐます、どうぞよろしく野村氏に小生から紹介状を渡しました。

江戸川氏を狙つたのは小生ではなし『演藝画報』です。

探偵戯曲を書く氣はまだ起りませんか、

六月七日

長谷川伸

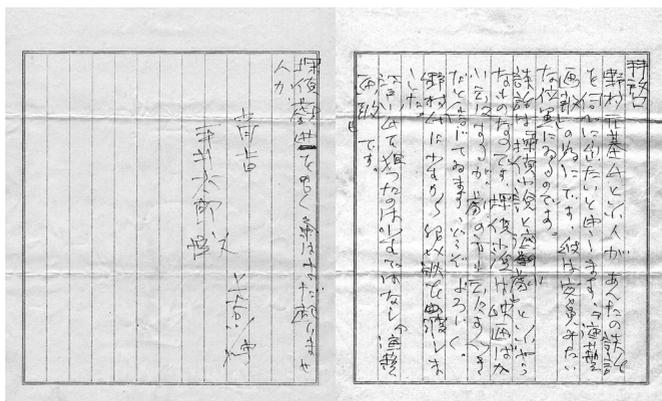
平井太郎殿

【消印】 白金467

【宛名】 市外戸塚町源兵エ一七九 平井太郎殿

【差出】 六月七日 東京市外大崎町桐ヶ谷八二九

長谷川伸



書簡① 一九二九(昭和四)年六月十九日【封書】

拝啓

土師氏より来書。

耽綺社にて、日活よりシナリオの相談をうけたと云ふ。五百円。條件は序詞に

『この一篇を警官達に捧ぐ』と入れる事——警視庁後援。

運びは新派悲劇、探偵の味。

監督は、阿部ジャック。

右に就き、左の回答を直接土師氏まで、大至急願ひたし。

一、製作引受の賛否、

二、賛成ならば會合の場所、(東京

右につき、小生は

(一) 引受賛成

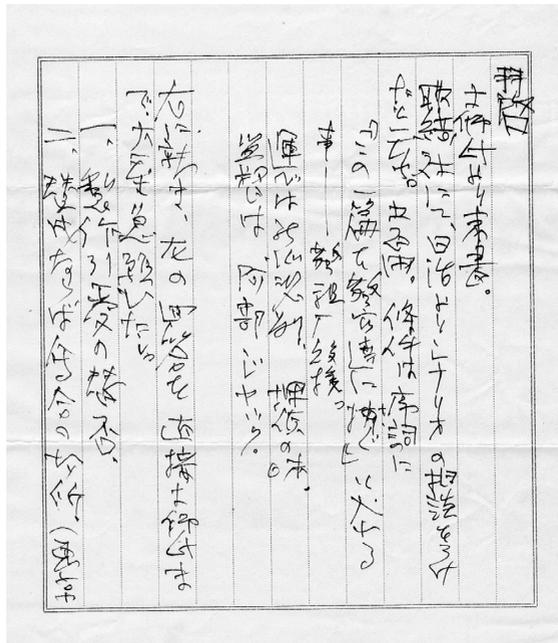
(二) 不木氏墓参、全集刊行報告を予定に入れ、ば名

古屋、

然らざれば東京、

第一説は七月早々

第二説は今月末、

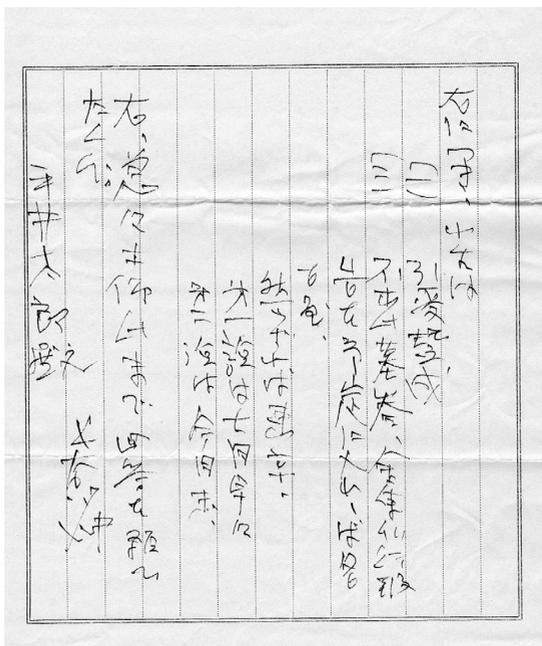


右、急々土師氏まで回答を願ひ
たく候。

長谷川伸
平井太郎殿

[消印] 4.6.19

[宛名] 市外戸塚町源兵エ一七九 平井太郎殿
[差出] 東京市外大崎町桐ヶ谷八二九 急



書簡⑫ 一九二九年(昭和四)六月二十六日【葉書】

只今(二十六日夜九時半着)

土師氏より電報これあり候、

『一日集る、日活から三名

参加、』——当然、名古屋集合、

場所は大須ホテル。勿論、不木氏

墓前に詣でるものなり。

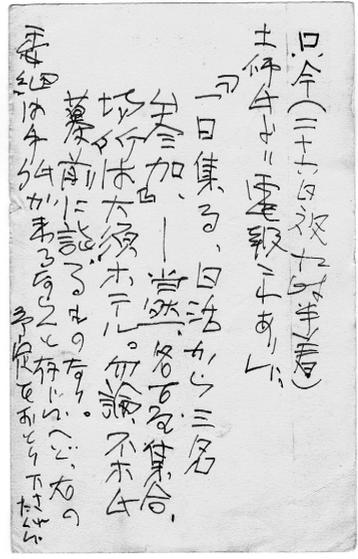
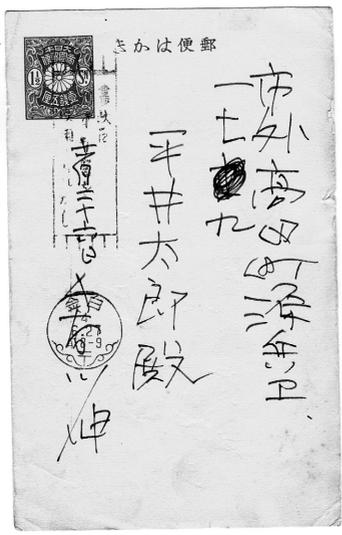
委細は手紙が来るならんと存じ候へど、右の

予定をおとり下されたく候

【消印】 白金4627

〔宛名〕 市外高田町源兵エ一七九 平井太郎殿

六月二十六日 長谷川伸



書簡⑬ 一九二九年（昭和四）六月二十八日【封書】

拝啓

土師氏より同封の如く申越し候。

小生及び平山氏は■一緒に出発
します。時間は平山氏が二十九日中
にお宅へ電話で知らせる筈に候。その
節、貴下の御出発の予定をお知ら
せを得たく存じ候。

余は拝芝万々。

不木集一冊を届けくれるやう——
前に同人より捧ぐる為——岡戸
武平氏を通じて改造社に乞ひ置き
候。

六月二十八日 長谷川伸

平井太郎殿

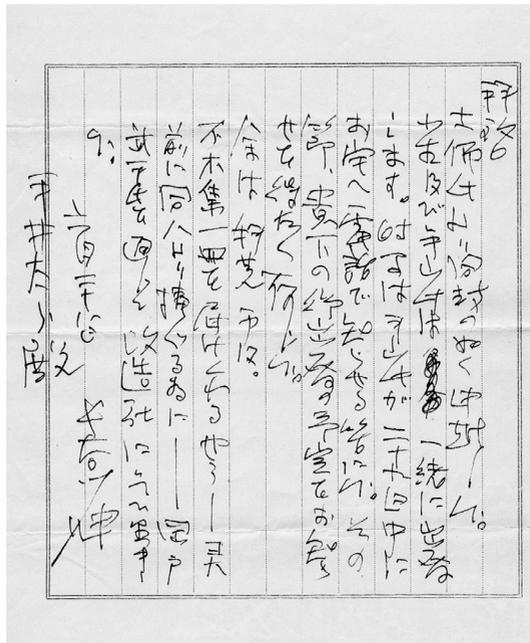
【同封書簡】

拝啓

日活から三人参加します。

阿部監督。亀原（これは脚色家

？）服部泰之（文藝部、小生の友達）



あれから飛驒の下呂温泉へ行き

二泊して今日高山へ来ました。

雨の夜つれづれに不木氏を想ふ歌

など作りました。

今は亡き、小酒井不木の、手向けは

花に、まさる全集、一の巻。

耽綺社の、五人あつまる、御器所

の家に、不木還らず、三月経つ。

合作はあれから大難場、たうとう

徹夜でした。

飛驒高山にて

長谷川伸



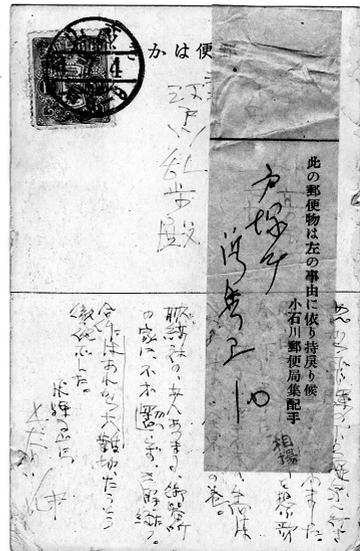
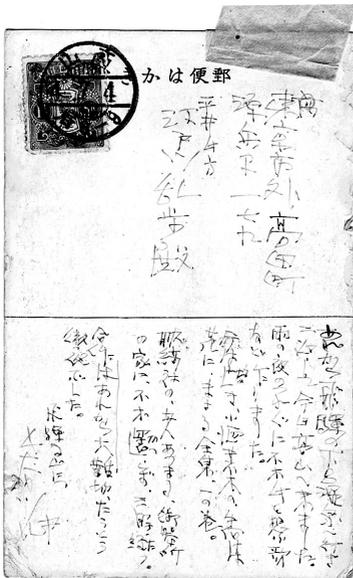
〔消印〕 高山474

〔宛名〕 東京市外高田町源兵衛一七九 平井氏方

江戸川乱歩殿

〔備考〕 「飛驒高山町七夕祭（八月七日）No.519」の絵葉

書。



書簡⑮ 一九三二年(昭和六)五月二十九日【封書】

拝啓

ご無沙汰しました、

早速ながら、友人市川小太

夫氏が貴作『黒手組』

を劇化したいと熱望

してゐます。新興座第

一回公演にやりたいと

いふのです。小太夫氏から

もお願ひに出ますが私

からも折入つてお願ひいたし

ます。

再拝

五月廿九日

長谷川伸

江戸川乱歩殿

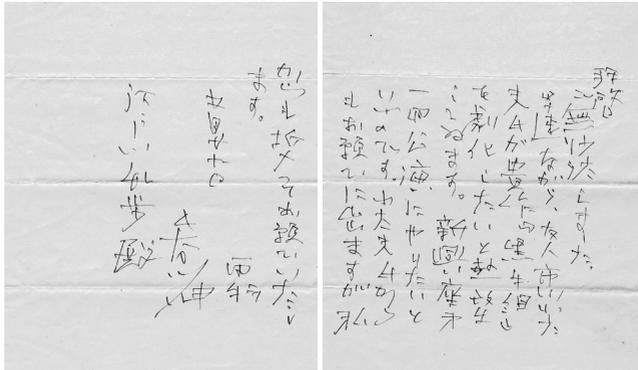
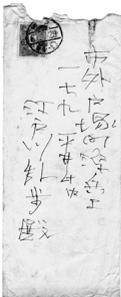
【消印】 6-5-29

【宛名】 市外戸塚町源兵エ一七九 平井氏内

江戸川乱歩殿

【差出】 五月廿九日 東京市外大崎町桐ヶ谷八二九

長谷川伸

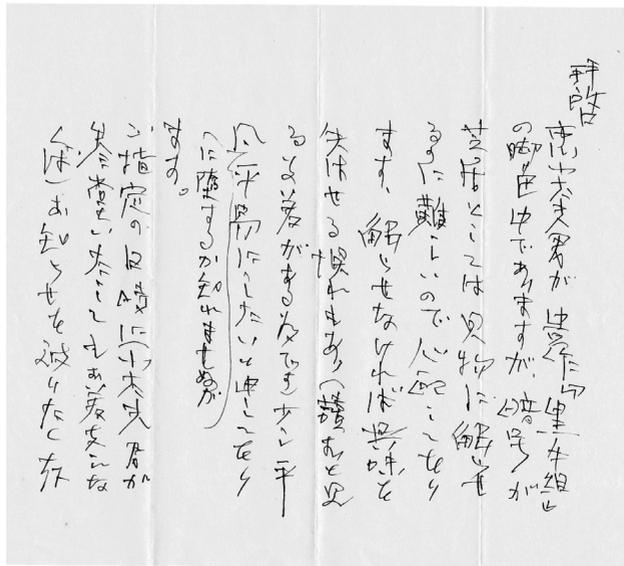


拝啓

市川小太夫君が貴作『黒手組』の脚色中ではありますが、暗号が芝居としては見物に解らせのりに難しいので心配してをります、解らせなければ興味を失はせる惧れもあり(讀むと見るとの差がある為です)少し平凡(に墮するか知れませぬが)平易にしたいと申してをります。

ご指定の日時に(小太夫君が参堂いたしてもお差支えなくば)お知らせを被りたく存じます。もし面倒と冀召さるる節は文書にて暗號の点をお伺ひいた「さ」せませす。いづれにしても脚色をご一讀願ひます。取急ぎ先は

新興座は帝劇で今月末、



第一『吉備津の釜』（平山蘆江氏作）

幕第二『黒手組』（貴作） 第

三『色彩間苺豆』一幕第四小生

作『譯振袖勝負』二幕と

決定いたしました。

七月三日 長谷川伸

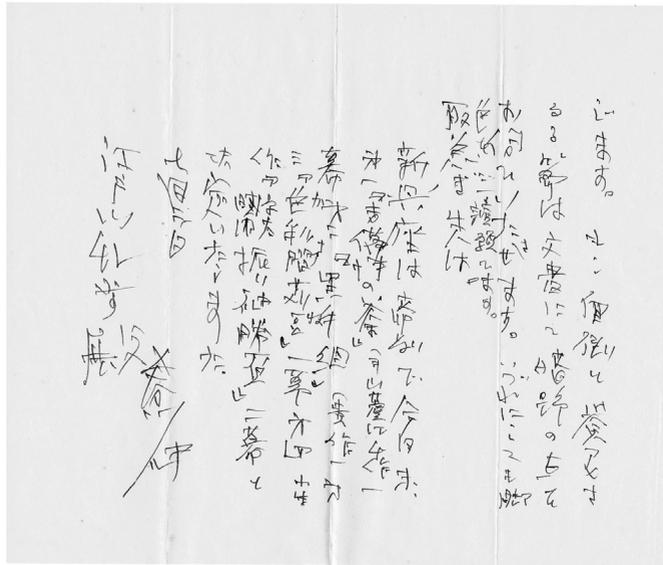
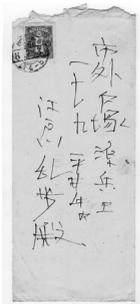
江戸川乱歩殿

〔消印〕 大崎のり

〔宛名〕 市外戸塚町源兵衛一七九 平井氏内

江戸川乱歩殿

〔差出〕 七月三日 東京市外大崎町桐ヶ谷八二九



書簡⑰ 年代不詳 二月二十八日 封書

拝啓

山村魏氏をご引見くださ
れるなれば幸甚に候。

同氏は故小酒井不木氏より

小生は紹介され、その後、ズッと

知合ひの人に候。

二月二十八日

長谷川伸

江戸川乱歩様

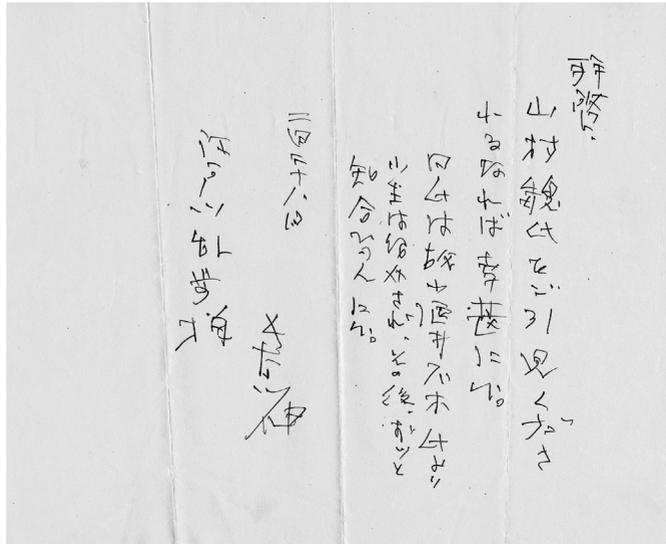
〔消印〕 切手共ナシ

〔宛名〕 江戸川乱歩様 山村魏氏持参

〔差出〕 東京市外大崎町桐ヶ谷八二九 長谷川伸

〔備考〕 年代未詳。長谷川伸の住所が「市外」であること、

小酒井不木没後であることから、便宜上、⑰と⑱
の間に配置した。



書簡⑧ 一九四五年（昭和二十）十一月六日【封書】

拝啓

『石榴』一巻有難く拝受仕候序

文只今拝見いたし候廿一日會の

昔そぞろ思ひ浮べられ感慨深

く更にその以前小生不振の時代

京都名古屋のことなど黒づくめ

の装禎をみつむるうちに回顧い

たさ「れ」候やがて十年になるも敢へて

遠からずと存じ鴨川の宿屋に訪れ

し宜のこと思ひうかべて鮮かに候

お礼まで

十一月六日夜半

江戸川乱歩様

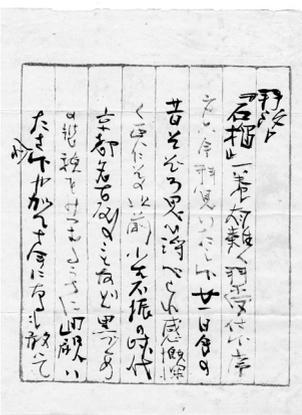
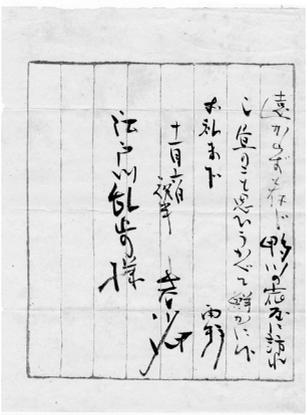
再拝

長谷川伸

【消印】 20-11.7

【宛名】 豊島區池袋三ノ一六二六 江戸川乱歩様

【差出】 東京市品川區西大崎四ノ八二九 長谷川伸



【注】

- 1 江戸川乱歩『探偵小説四十年(上)』(光文社文庫、二〇〇六年) 一六〇〜一六二頁も参照した。
- 2 伊東昌輝「長谷川伸年譜」(『長谷川伸全集』第十六巻、朝日新聞社、一九七二年)を参照した。
- 3 前掲『探偵小説四十年(上)』一四〇〜一四一頁。
- 4 この時期、長谷川伸が『探偵趣味』に寄稿したものは、随筆「四いろの人玉」(一九二六年十一月)と掌編小説「売物一代記」(一九二七年二月)の二本。
- 5 浜田雄介編『子不語の夢—江戸川乱歩小酒井不木往復書簡集』(乱歩蔵びらき委員会、二〇〇四年)に拠る。
- 6 小酒井不木「探偵小説劇化の一経験」(『探偵趣味』一九二七年三月)によれば、一九二六年末に新守座の文芸部員から「探偵小説劇」の執筆を乞われ、躊躇していると大晦日に河合武雄が訪ねてきて直接依頼を受けた。かつて『キング』一九二六年九月号に発表した小説「紅蜘蛛の怪異」を「骨子として、それを髣髴物化した」もので、不木は「探偵小説の劇化といふことを機会があらば試みたいと思つて居たので、折角の機会を見のがしてはならぬと、それをとらへた」という。
- 7 前掲『探偵小説四十年(上)』二九〇〜二九一頁。
- 8 前掲注2に同じ。
- 9 前掲注5に同じ。
- 10 耽綺社については、斎藤亮「小酒井不木と『耽綺社』」(『郷土文化』名古屋郷土文化会、一九八五年十二月)、耽綺社同人『空中紳士』(春陽堂、春陽文庫、一九九四年)および同『白頭の巨人』(同前)所載の山前譲による巻末解説も参照されたい。なお従来言及されていないが、小酒井不木「残された一人」新守座上演について(『名古屋新聞』一九二八年一月十六日朝刊)にも発足時の経緯が記されている。
- 11 喜多村九寿子編『喜多村緑郎日記』(演劇出版社、一九六二年)一九二六年四月一日条、同月五日条、八月六〜八日条、十三日条を参照した。
- 12 前掲『喜多村緑郎日記』一九二六年九月二十三日条。
- 13 一連のいきさつについては、無署名「名弁護士会の陪審法劇 台本は小酒井博士が書く」(『新愛知』一九二六年八月十五日朝刊)、同「裁判長も決る 出演俳優もそろふ 廿六日から模擬裁判劇」(『新愛知』同月十九日朝刊)、同「ぞんげい」(『名古屋新聞』同月二十一日朝刊)なども併せて参照した。
- 14 同時代紙の中には「喜多村緑郎は行き詰つた新派の新しい進路は探偵劇による他はない」(無署名「末廣座の陪審劇 小酒井博士と喜多村の会見」『新愛知』一九二六年八月二十二日夕刊)という意見を持つていたとの記事がある。
- 15 前掲『子不語の夢』脚注二二二(一四七頁)を参照のこと。
- 16 たとえば、初日を観た喜多村は「舞台の出来は到底望むにいたらない事は、予想通りだ。が、どうにかまとまりはついた。一同からは、「お陰様でまとまりました」などといはれたが、脚本よりはま

- とまつたわけである」(前掲『喜多村緑郎日記』一九二六年八月二十六日条)と記している。
- 17 前掲注6を参照のこと。
- 18 喜多村緑郎「むかしの想出」(『別冊宝石』一九五四年十一月)によれば、乱歩宅への訪問前に、すでに知己であった国枝史郎、土師清二、長谷川伸とともに乱歩と初対面を果たしているという。前後関係は不分明ながら、前掲『喜多村緑郎日記』の初対面と思しき印象の記述を重視したい。
- 19 小酒井不木によれば、マーク・トウェインの小説から発想し、喜多村緑郎に立役と女形の二役を演じさせようと思いついたという。執筆にあたっては一日十二時間、四日間かかったようだ(『耽綺社座談会』『サンデー毎日』一九二九年二月三日)。土師清二「耽綺社打明け話」(『大阪朝日新聞』一九二九年二月三日朝刊)によれば、一九二七年十一月二十二日に完成したとある。
- 20 前掲『子不語の夢』一九二七年十二月八日付不木書簡も参照のこと。
- 21 前掲『子不語の夢』一九二七年十二月二十四日付不木書簡も参照のこと。
- 22 一九二八年一月二十一日付『名古屋新聞』朝刊掲載の観劇会の広告には、特等が二円三十五銭のところ一円八十銭に割引の上「小酒井博士揮毫肉筆短冊進呈」とある。
- 23 前掲注5に同じ。
- 24 前掲『探偵小説四十年(上)』三二五～三二八頁。なお一九二八年一月十九日付乱歩宛不木書簡をみると「手術の経過如何ですか(○)案じて居ます」(前掲『子不語の夢』二三七頁)という一文があり、手術・入院の正確な時期については未詳。また同二十三日付書簡に「長谷川氏の手紙により心配に堪へません」(前掲『子不語の夢』二四一頁)とあることから、長谷川伸はただちに乱歩の様子を不木に知らせたと思しい。
- 25 長谷川伸「耽綺社の指導者」(『サンデー毎日』一九二九年四月十四日)。
- 26 「長谷川伸戯曲集(収録)著作年表及び初演年表」(『長谷川伸戯曲集』下巻、新小説社、一九六〇年)および前掲「長谷川伸年譜」を参照した。
- 27 大笹吉雄「日本現代演劇史 明治・大正篇」(白水社、一九八五年)二六二～二六六頁。
- 28 長谷川伸「耽綺社の指導者」(前掲注25)。なお、不木による追悼文「沢田氏を悼む」は「絶筆」として『サンデー毎日』(一九二九年四月十四日)の不木追悼特集に掲載された。
- 29 長谷川伸と島源四郎の関係については、島源四郎「出版小僧思い出話(7)長谷川伸先生のこと」(『日本古書通信』第六六七号、一九八五年二月)、同「出版小僧思い出話(8)長谷川伸先生のこと(続)」(同第六六八号、同年三月)を参照のこと。なお島はのちに長谷川伸の妹と結婚している。
- 30 『小山内薫全集』は一九二九年から一九三二年にかけて全八巻を刊行。

31 前掲『子不語の夢』脚注五一八および五一九（二七七〜二七八頁）を参照した。

32 江戸川乱歩『耽綺社』（わが夢と真実）東京創元社、一九九四年。

初出は『東京新聞』一九五六年九月十九日）も参照した。

33 前掲『日本現代演劇史 明治・大正篇』二七一〜二七五頁。

34 前掲注26に同じ。

35 引用等は新保博久編『明智小五郎集』（講談社、一九九五年）に拠る。

36 紅野謙介・森井マスキ編『新編喜多村緑郎日記』第一卷（八木書店、二〇一〇年）に拠る。

37 書簡⑧によれば、長谷川伸は「序文」を読み、また「黒づくめの装禎」を見つめるうちに「やがて十年になるも敢へて遠からず」（傍線引用者）と過去の記憶が鮮やかによみがえっている。それらに鑑みると、乱歩が送った『石榴』は、序文があり、乱歩自身が装幀をした、柳香書院から一九三五年に出版されたものと思しい。同書を乱歩は「一度は『これが私の著述です。御閑の時にどうか御一読下さい。御読みになつたらこの本をあなたの本棚の隅に飾って置いて下さい。』と云へるやうな著書が出版して見たいものだと考へて」（序）特別につくったのであり、出版後十年が経った時点で長谷川伸に贈った理由は定かでないが、長谷川伸にとっての十年前の時間の重さもうかがえる。

乱歩記念大衆文化研究センター、また財団法人新鷹会に篤く御礼申し上げる。引用文中の「」は引用者による注記である。

（立教大学社会学部教育研究コーディネーター）

〔付記〕資料の閲覧・翻刻等の際してご高配を賜った立教大学江戸川